



▲4年連続で山を下った若林陽大主将

「楽しそうに走ってる」
背中でおかる選手の息遣い

「世界へ行くんだ」
監督の熱い声かけに身震い

陸上競技部長距離ブロック マネジャーが見た、感じた「箱根」

中央大学が総合2位となった第99回箱根駅伝（2023年1月2、3日）で、藤原正和・駅伝監督の運営管理車に同乗して、選手に伴走したのが、出納佳さん（商4）、炭山遥香さん（経済4）の陸上競技部長距離ブロックのマネジャー2人だった。選手を奮い立たせる監督の言葉を間近で聞き、仲間の背中を見続けた記憶、思いを振り返ってもらった。（競技写真はすべて月刊陸上競技提供）

運営管理車で 多岐にわたる“仕事”

炭山さんが1月2日の往路、出納さんは3日の復路で、助手席の藤原監督から対角にあたる運転席の後ろに座った。“仕事”は多岐にわたる。5キロごとに計る走破タイムは監督の声かけの基本データとなり、中継所で待機する選手に付き添う部員と連絡を取り合っ、スタート前の最後の指示を出す監督との仲介役も務める。

各区間に配置されたマネージャーが計った他校とのタイム差や、リアルタイムの気温、風向き、太陽の出方などもLINEで情報共有する。刻々と変化する気象の情報は、たとえば手袋の着用の有無などを判断するのに役立つ。区間配置のマネージャーはそれぞれ電車で移動しながら複数の区間を受け持つという。

往路で運営管理車が伴走したのは2区の途中、復路は6区途中から。炭山さん(往路)、出納さん(復路)の記憶やさまざまな思いを紹介する。

「じりじりする思い」 「でも走れちゃう、すごい」

往路1区・溜池一太選手(1年)＝スローペース。関東学生連合の選手が飛び出したが、誰もついていかず、集団を引っ張る選手もいなかった。「じりじりする思い」でスマホの画面を見つめる。

2区・吉居大和選手(3年)＝「お前は世界に出ていくんだから、ここで



区間4位で7区を駆け抜けた千守倫央選手(左)▲

負けるわけにはいかない」。監督の熱い声かけに身震いした。その言葉もあって最後は足が動いたのかな。

3区・中野翔太選手(3年)＝調子を崩し、2022年11月の全日本大学対校選手権を走れなかった。練習量は十分だろうかと気をもんだが、「でも走れちゃう、すごい」。

4区・吉居駿恭選手(1年)＝青山

学院大に追いつかれたときは「置いていかれがちになり、しんどそうだった」。でも1年生として良い経験。「来年こそ納得のいく走りを見せてほしい」

5区・阿部陽樹選手(2年)＝最初の入りで前に行く駒澤大との差を詰めていった。監督の声かけもあって、行けると思ったんですが…。



▲8区の中澤雄大選手

まで箱根ではいい記憶がなかったが、4年になって奮起し、殻を破った。私は全然不安はなかった。監督の熱い声かけは「駒澤が見えている。お前ならいける」。

8区・中澤雄大選手(4年)＝前回(8区3位)の走りからも安心して見ていられた。^{たすき}襷をつなぎ、運営管理車の監督と走ってきたコースに向けて、気をつけの姿勢で一礼する様子に「やっぱり中澤だな」と改めて感じた。

9区・湯浅仁選手(3年)＝前回(9区3位)の良い走りの印象があり、心配はなかった。誰よりも努力する選手で、周りの信頼も厚い。

10区＝助川拓海選手(4年)＝いつもあと少しでメンバー入りを果たせなかった。「来年こそ」が続いた選手。日差しを浴びて輝いていた。

▼フィニッシュした助川拓海選手(右)。左は出迎えた田井野悠介選手



「どうしても区間賞をー」 「やっぱり中澤だな」

復路6区・若林陽大主将(4年)＝スタート前、リラックスした笑顔が頼もしかった。箱根湯本駅を過ぎた終盤から伴走し、どうしても区間賞を取らせたいという監督の気持ちのこもった声かけが耳に残った。

7区・千守倫央選手(4年)＝これ

選手に「納得のいく結果」 「幸せな思い」を

マネジャー 炭山遥香さん(経済4)

4年前の入学直後、多摩キャンパスで陸上競技部のマネジャーから、たまたま入部勧誘のチラシを受け取った。陸上競技のことは全く知らなかった。入部したのは「何かを頑張っている人のそばにいる。そうすれば自分も本気で頑張れる」と思ったからだ。当時は「マイペースで考え方も自分中心」と感じていた自身が、マネジャーの活動を通して変わったという。

「選手が日本一を目指して成長するなら、マネジャーも成長しないといけない。これまでと同じことをしていたら、それは後退だ」。常に前を見

据える藤原監督の言葉を励みにして、日々、選手の努力や喜怒哀楽を一番近くで見てきた。

「雨は嫌いだけど、真夏なら選手には恵みの雨」。そう自然に思えるようになった自分を不思議に感じている。「選手本人が納得いく結果を出してほしい。陸上を知らない私だからこそ、一緒にやってきた選手には幸せな思いをしてほしい」。そんな気持ちを抱き続けてきた4年間だった。コースを走り切った選手的笑顔に、マネジャーとして報われた思いがしている。



▲LINEの情報共有など運営管理車での仕事を説明するマネジャーの炭山遥香さん



「この同期生たちでよかった」

マネジャー 出納佳さん(商4)

運営管理車への同乗で印象に残ったことを尋ねると、10区を笑顔で走る助川拓海選手(4年)の姿を一番に挙げた。伴走車からは背中しか見えない。選手の表情は分からないが、足取りも軽く、スキップするような走りに見えた。普段の練習で走りの特徴をつかんで

いるからこそ、背中で表情まで推し量れた。

ソフトテニスに打ち込んだ高校時代、けがでプレーヤーとしての活動が難しくなった時期もあった。部活動の顧問の教諭から「仲間のために何ができる?」と言われ、マネジャーを担当。選手を支える人の存

在の大切さを知り、大学ではマネジャーの道を選んだ。

10区の後半10キロの車内はほとんど言葉もなく静かだったという。ふと監督に目を向けると、まぶたに手を当てていた。その様子を見て、出納さんも堪えていた涙があふれだした。

10区を走る候補には同じ4年の田井野悠介選手の名も挙がっていた。田井野選手は大手町でフィニッ

シュする助川選手を笑顔で迎え、襷を大事そうに握りしめた。「こういう人がチームにいたからこそ2位に

もなれた。私は田井野の姿が誇らしかった」。出納さんはそう言って同期生の皆に感謝した。



▲同期の選手たちとマネジャーの出納佳さん(右端)。2年生当時の懐かしい一枚(出納さん提供)

第99回箱根駅伝 総合成績

順位	大学名	記録(時・分・秒)
①	駒澤大	10・47・11
②	中央大	10・48・53
③	青山学院大	10・54・25
④	國學院大	10・55・01
⑤	順天堂大	10・55・18
⑥	早稲田大	10・55・21
⑦	法政大	10・55・28
⑧	創価大	10・55・55
⑨	城西大	10・58・22
⑩	東洋大	10・58・26
⑪	東京国際大	10・59・58
⑫	明治大	11・01・37
⑬	帝京大	11・03・29
⑭	山梨学院大	11・04・02
⑮	東海大	11・06・02
⑯	大東文化大	11・06・08
⑰	日本体育大	11・06・32
⑱	立教大	11・10・38
⑲	国士舘大	11・13・56
⑳	専修大	11・19・28

(参考記録)

関東学生連合 11・17・13

第99回箱根駅伝 中央大学 区間記録

区間	選手名(学部・学年)	記録(時・分・秒)
1区	溜池 一太(文1)	1・03・02 ④
2区	吉居 大和(法3)	1・06・22 ①
3区	中野 翔太(法3)	1・01・51 ①
4区	吉居 駿恭(法1)	1・01・49 ⑤
5区	阿部 陽樹(文2)	1・10・36 ③
往路2位=5時間23分40秒		
6区	若林 陽大(法4)	58・39 ②
7区	千守 倫央(商4)	1・03・15 ④
8区	中澤 雄大(経済4)	1・04・58 ⑦
9区	湯浅 仁(経済3)	1・08・54 ⑥
10区	助川 拓海(経済4)	1・09・27 ③

復路2位=5時間25分13秒

総合2位=10時間48分53秒

※丸数字は区間順位





センターステージ

世界の中央で活躍を

国際経営学部、国際情報学部から初の卒業生

2019年に開設され、中央大学で最も新しい学修の場である国際経営学部 (GLOMAC= Global Management of Chuo University)、国際情報学部 (iTL=Information Technology & Law) から、初めての卒業生がこの春、世界のステージへと飛び立つ。コロナ禍の影響もあった4年間で、1期生たちが学修し、体験し、学び得たものは何だったのか。2学部の卒業生6人に綴ってもらった。

**国際
経営** 学部

井原さわ香

「英語漬け」の4年間
語学力向上を実感

私が国際経営学部で学ぶことができてよかったと思う理由は主に2つあります。それは、常に英語に触れることができる環境に身を置けたことと、自分を高めてくれる仲間に出会えたことです。

まず1つ目については、私が履修したクラスでは、講義形式の授業

の8割が英語で行われていたことはもちろん、ディスカッションやプレゼンテーションを主とした双方向型のゼミの授業も百パーセント、英語で行われていたことがあります。自らの意見を言葉にすることが必要な授業の中で、日本語でならもっと明確に意見を主張できる

のに、と思うことや、作文やプレゼンテーションでの言葉の言い回しに苦戦することの繰り返しでした。

しかし、それでも英語でやらなければならない環境であったため、辞書で調べたり、教授の力をお借りしたりしながら時間をかけて取り組みました。その結果、英語で考えた



◀旅行先のインドネシアで友人に誕生日を祝ってもらった際の一枚＝2022年9月

営学部が何かの目標に対して意欲的に行動している人と多く出会える場所であったことが背景にあります。私たちは2年生を迎えるタイミングで新型コロナウイルスによるオンライン授業を余儀なくされ、2年生の後期から始まったゼミもクラスメイトとの初顔合わせはZoom越しという異例のスタートとなりました。

やりたいことをやる、という当たり前なことがやりにくくなってしまった環境下でコロナという言い訳をいくらでも使ってしまう中、周りの友人たちは皆、目標を持ち、意欲的に行動している人ばかりでした。

さらに、この学部はさまざまなバックグラウンドを持った学生の集まりであり、育った環境や考え方の異なる人と多く出会える場所でもあります。それでも皆に共通しているのはオープンマインドでお互いを尊重し合う姿勢を持っているということです。人を否定したり優

劣をつけたりすることはせず、それぞれが違った考え方や目標に胸を張って取り組む友人たちの存在は、私にとってとても良い刺激になりました。そんな友人たちに囲まれた4年間だったからこそ、私は今自分なりの目標を持ち、それをかなえるために新たな道に進む準備ができています。



高校時代の留学先で知り合った▲友人を訪ねたドイツで＝2023年2月

り、英語で言葉を発したり、常に英語に触れることのできる環境で4年間を過ごすことができました。

私は帰国子女であるため、英語力を維持させたいという思いで入学しましたが、この4年間を通して維持に留まらず、向上させることができた実感しています。

意欲的な仲間との出会い

2つ目の自分を高めてくれる仲間との出会いについては、国際経

国際 経営 学部 木村直斗



学修から得た 最大の財産は「論理的思考」 ひらめき優先から転換

国際経営学部での学びを通じて得た最大の財産は、論理的思考を身につけることができたことです。

大学入学前の私の思考プロセスはひらめき最優先で、なぜそう思ったのかをあまり重要視していませんでした。なぜその結論に至ったか、その結論に至るまでの過程で、

「ほかの案は思い浮かばなかったのか」「私が持っている知識のうちどの部分はその結論の背景にあるのか」等々、結論を導くために考えるべきことはたくさんあるのに、当時はその存在に気づくことすらできていませんでした。

しかし、学部で講義を受ける中

学部カリキュラムの短期留学で行ったIMF(国際通貨基金)ワシントン本部内で。
右が木村さん、左は同じ国際経営学部4年の若林航太さん=2019年9月▶

で、そのような自分を変えなければ
ならないと思うようになりました。
講義では毎日のように英語でグ
ループワークを行い、グループ内で
なぜそう思ったのかを、自らの言葉
で説明します。そして、ディスカッ
ショングループのメンバーたちはそ
れぞれ異なったバックグラウンド
を持っています。

同じ日本人同士ならあえて口に
しなくても察する、読み取れるもの
がありますが、国際経営学部内では
そのような常識は通用せず、一
から十までしっかり言葉にして意
見を伝える必要がありました。

思考プロセスを 頭の中で整理、 順序立てて説明する

そのため、自分の意見を正しく伝

えるためには、どのような思考プロ
セスを経て思い至った意見なのか
を頭の中で整理する、だれでも理解
できるように順序立てて説明する、
そういった論理的な思考の重要性
がとても大きく感じられ、その点を
意識して毎日の講義に臨みました。

論理的思考が少なからず自分の
力になっていると感じたのは、就職
活動においてのことでした。グループ
ディスカッションやケース面接といっ
た、唯一絶対の正答が存在しない課
題に対してどのように取り組むかが
評価される就職活動の選考過程の
中で、日ごろから鍛えられている論
理的思考が大変役に立ちました。

私は卒業後、クライアント企業
が抱える悩みを共有し、専門的な
観点から解決策を提案する経営コ
ンサルタントとして働きます。その



業務上で明確な答えの出ない課題
に対して、チームで取り組む機会に
多く恵まれることとなるでしょう。
その際に、この学部の学びで身に
着けた論理的思考を活用すること
はもちろん、よりレベルの高いもの
へと磨きをかけることができるよ
うに努力し続けたいと思います。

国際 経営 学部 滝田哲之

英語の授業、留学、企業訪問 「GLOMACで濃密な時間」 大学院生になっても新たな環境で挑戦



GLOMACの門を叩いてから早4
年、気づけば卒業生第1号となりま
した。

思い返すとGLOMACで過ごした
時間は非常に濃密でした。使用言
語のほとんどが英語である経験は
それまでの人生でなかったもので
したし、経営学や経済学など今ま
でとは大きく異なる科目の学習も
新鮮でした。さらに1カ月の短期留
学や企業訪問、英語での論文作成
などGLOMACならではの経験をさ

まざまに積んだ1年目。そしてコロ
ナ禍という未曾有の事態に直面
し、慣れないながらもオンライン
形態での授業に取り組み、また初
めて後輩たちを迎えた2年目。専
門科目が増え本格的に将来に向け
て各々に必要な科目を学び始め
た3年目、そして進学に向けた勉強
と卒業論文執筆に注力した今年と、
激動の4年間を過ごしてきました。

そのどれもが現在の私を形成す
る大切な経験です。特に、新しいこ

とに挑戦する姿勢は4年間で培われたと思っています。英語で授業を受けることも、留学や企業訪問、学生主体の団体活動など、さまざまな経験も、すべてはGLOMACへ入学したからこそ得られたものです。また、上級生がいない上に参考になる前例もなかったこの学部では、どうすればより良い環境にできるか、どんなことをすれば面白いのか、と常に同期たちと試行錯誤してきました。その環境がさまざまなことに挑戦する雰囲気形成していたと思います。

上級生のいない環境…同期生と常に試行錯誤

今の自分にはないものを得るため

に思い切って新しい環境に挑戦すること、これこそが私が4年間で得た最も大きな成果なのだと確信しています。今春から大学院生になりますが、大学院生になっても社会人になっても、この姿勢を忘れずに挑戦し続けたいです。

卒業に際して心残りがあると思えば、2期生以下の後輩諸氏とあまり話せなかったこと。オンライン授業だったため関わる機会も数えるほどしかありませんでした。もっと同じ時間を共有し、一緒に学びたかった、と口惜しく思っています。

そんな後輩たちに、卒業する身から一言。

自由気ままに、さまざまなことに挑戦してみてください。

私たち1期生は好き勝手に挑戦してきました。それを導いてくれた教授陣、支えてくれた事務室の方々、そして一緒に走りぬいてくれるかけがえのない同期たち。私たちが4年間挑戦し続けられたのも、間違いなく皆のおかげです。皆さんの周りにもきっと、そんな心強い仲間がいます。失敗を恐れず、努力を怠らず、常に未来を見据えて挑戦し続けてください。GLOMACの今後の発展を心から祈っています。頑張ってください！

国際情報学部 梶山隼利

学際的な思考、深く「デジタル」学ぶ科目、実務家の講義…魅力的なカリキュラムが「財産」を生む



iTLが想定している進路の一つに、「インターネット広告、ゲーム、配信メディアを開発する企業でサービス・コンテンツの企画、発信

を行い、デジタルビジネスの時流をつくる」というものがあります。そのため、iTLのカリキュラムにはデジタルサービスについて深く学べる科目が複数設置されており、特に3年次から選択できる科目ではそのような業界で働く実務家を招いた講義が多く行われます。

大学入学以前からゲームやアニメといったデジタルコンテンツに興味があり、将来的にはそれらに関わる業界に就職したいと考えていた私にとって、これらの科目は非常に魅力的かつ有意義なものでし

た。内容としては、ビジネスモデルや歴史のような基礎的なものから、実務家ならではの体験に基づいた業務についての話まで、幅広く業界を理解するのに役立つものばかりでした。このような科目は後の就職活動に生きたと感じています。

iTLで学んだ学際的な思考と自分が興味を持つ分野の専門的な学びを仕事に生かしたいと考え、元々興味があったゲーム業界で企業の中核に関わる業務を軸に就職活動を行いました。そして、私自身がゲームを通じてエンターテインメン

トコンテンツの楽しさや奥深さを
知ったことから、より多くの人々に
楽しさや感動を伝えたいと思い、
ゲームソフトウェアメーカーに入社
を決めました。

社内外の人々をつなぐ 架け橋の存在に

入社後は、経営側と開発側の橋
渡しとなるような社内業務や、会社
を取り巻く全てのステークホルダー
と会社をつなぐ社外業務などに関
わり、さまざまな人々をつなぐ架け

橋となる人材になりたいと考えて
います。就職活動を終えて思うこと
は、iTLの文理を問わない複合的な
カリキュラムの中で自分の興味の
赴くままに科目を選び学んできた
内容は、これからの社会に必要な
ものばかりだということです。

ITの利活用が急速に発展し続け
る現代では、学際的な視点で物事
を考えられる人材が至る所で必要
とされており、iTLではこのような
人材になるための多くのことが学
べます。4年間の学びは就職活動

のみならず、この先の人生にとつ
ても貴重な財産になると確信してい
ます。

そして在学生の皆さんにはぜひ、
iTLの学びを通してITとそれを取り
巻くルールや世界の動向を最前線
で追いながら、自分がこの情報社
会でどのように生きていくかを、大
学生生活という自由に使える時間
の中で悩み考えていただきたいです。
皆さんの大学生活が実りのある4
年間となるよう願っております。

国際 情報 学部 郡司大河

卒業にあたって、いろいろな感
情が込み上げてきます。特に強い
のは「あの時、iTLに進学を決めて
よかった」という思いです。理由は
数多くありますが、今回の寄稿で
は「自主性」を中心に述べていき
たいと思います。

iTLは中央大学の新設学部、新設
キャンパス。この春卒業の私たち1
期生が最初の卒業生です。入学当
初はまささらなキャンパスに自ら
の手で絵を描いていくような心持
ちでした。「先輩がいない」「他学部
の仲間がそばにいない」ことの心
配よりも、「自分で何かを創り上げ
たい、成し遂げたい」という考えが
入学前にあり、iTLはその環境に
ぴったりでした。

全ては、自分の思い描いている

何かを創り上げ、成し遂げる環境 iTLはキャリアを思い描く学びの場

キャリアのためです。大学はそのた
めの学びの場でした。iTLでは情
報、法学、グローバル教養など非常
に多くのことを学ぶことができます。
私はその中でも情報もたら
す可能性を授業の中で見出し、
「IT×ビジネス」の領域で勝負しよ
うとキャリアの軸を決めました。

“弱み”を見せる 勇気を持つ

1、2年次はサークル創設とそ
の発展、3、4年次は就職活動に
フォーカスしました。私も就活に不
安を抱える多くの大学生の1人だ
した。インターン先で出会う他大学の
優秀な学生や、企業からの大量の
不合格メール。結果として自分の望
む会社に入社することができます

が、100社以上エントリーして内定
したのは10社ほどでした。

自分自身でPDCA(Plan・Do・
Check・Act)を回して改善できるこ
ともありましたが、一番の力になっ
てくれたのは学内の友人たちです。
iTLは情報、国際分野など専門的な
分野の学問を選択して学べる特性
上、それぞれの分野に特化した人
がいます。自分の“弱み”を見せる勇
気を出し、私が頼った友人たちは
快く手を差し伸べてくれました。

「個人として努力し、成果を上げ



る」「リーダーシップを発揮し、周囲を巻き込んでの目標達成」「新しい仕組みや企画を提案し、実現する」。私はこれらの理由から卒業後の進路を決めました。

iTLは決して大きいキャンパス、学生規模ではないですが、小規模学部ゆえの学生間の距離の近さはとても大きなメリットだと感じます。また、いろいろな人と会うことが

でき、学びを得ることができます。

人は案外優しいものです。恐れず話しかけてみましょう。学びの場iTLで、後輩の皆さんも自主性を持って未来を切り拓いてください。

国際 情報 学部 千葉七星

大きかった“余白” 「自分たちで環境や機会を作っていく」 学びと思考の幅が広がる



私がiTLに入学してよかったと思うことは、大きく分けて3つあります。1つ目は、まだ歴史がない学部であることです。特に私たちは1期生だったので、先輩はいませんし、この学部での時間をどう過ごすか、この環境で何をするかに関する余白はとても大きかったです。

他の大学や学部に行けば、大体は「その環境にあるものを使う」という感覚になると思いますが、ここでは何をやるにしても「自分たちで環境や機会を作っていく」ことが求められます。中央大学という潤沢なリソースや一流の先生方を抱える

環境下で、自分たちの意見を形にできるという特別な経験をできることが一番の魅力だと思います。

実際に私も、入学してすぐに幹部の一員として仲間と一緒に国際情報学部の学園祭実行委員会を設立しました。学園祭実行委員会の存在意義から書類にして事務室に提出する経験は絶対にiTLでなければできない経験だったと思います。

また、2つ目はここでしかできない学びとその学びの広さです。国際情報学部では「法学」「情報学」「国際文化」の3軸で学びが形成されています。1つの軸に対し、他の2つの軸の知見を持ちながら多角的な視点を持って学びを深められます。私の場合は法学を中心に学んできましたが、情報学や国際文化についての知見があれば、単に「これはダメだから厳重な規制をかければいい」という法律目線だけでの運用が今後の社会にとって良いものかどうかについて、多角的かつより実用的に思考する力を身につけることができました。学びと思考の幅が広がり、4年間iTLでの学びには

飽きることはありませんでした。

さまざまなバックグラウンド 多様性のある仲間たち

そして3つ目は、iTLにいる仲間の多様性です。学びの多様性と創造の余地を持つ環境という特徴から、さまざまなバックグラウンドを持つ友人や、自分にはないようなスキルを持っている友人に出会うことができ、「仲間」という要素だけで見てもとても魅力の詰まった環境だったと感じています。年次が上がってゼミでの研究が本格化してきたときには特にこの多様性を体感しました。

私は卒業論文に向けた研究のために判例や政府が発表した文章を読んでいるのに、ある友人はアプリを制作していて、ある友人は海外にフィールドスタディーに行っているというような状況がiTLでは普通です。自分ではその分野について勉強できていなくても、その分野を専門としている友人から話を聞くと、とても深い話が聞けるのでとても視野が広がりのいい経験になりました。



津波、戦火で亡くなった人たちへの思い 学生生活の最後、遺骨収集に携わる



▲福島で遺骨収集作業に携わった鈴木人生さん

学生最後の冬、私は人間の骨を探して、地面を掘った。

年末年始の12月30日から1月2日までの4日間、福島県双葉郡の大熊町で過ごした。帰宅困難区域に入り、被災者の方が娘さんの遺骨を捜索するのをボランティアで手伝った。娘さんは当時小学生で、津波に流されたという。

捜索の現場に着くと、よく霜が降っていた。昼が近づくと、土はぬかるむ。大きめのスコップを使ったり、猫車を押したりするときに踏ん張りが利かなくなり、頭を悩ませた。ハンドスコップなどで地面を少しずつ掘り進めると、粘土のように土が固まっていることもあった。そこに遺骨が紛れているかもしれない。手作業で細かく砕いて確認した。長い間、人間の手が入っていない場所のため、草木が太い根を張り巡らせている。スコップがうまく入らないときは、大抵その根っこが原因だ。そうでないときは、流木、あるいは石がじゃまをしていた。

作業をしていると、津波に流され、地中に埋もれたものが次々に出てくる。靴下やクマの縫いぐるみ、瓦、スレートといった建材までさまざまなもの掘り出した。だが、娘さんの遺骨は見つけることができなかった。

弔いとともに 社会の行く末を思う

1月28日、沖縄県糸満市で再び遺骨を探す機会があった。沖縄戦で死んでいった人たちの骨である。戦時、爆弾で吹っ飛ばされた人間は岩にぶつかったという。また、米兵から身を隠すために、洞窟の中に人々は逃げ込んだそうだ。だから、岩陰や洞窟から遺骨が見つかりやすい。

洞窟に入ると、内部は狭くて暗かった。腰を低く、頭が天井にぶつからないよう気をつけた。日差しが入らないため、片手にスマートフォンを持ち、ライトで照らして探した。しかし、またも私は遺骨を見つけることができなかった。

福島でも沖縄でも、細い木枝や小石のかげらを見つげると、「もしかして」と思った。木か、石か、骨か。たとえ骨であっても、人骨ではなく、獣骨の可能性もある。素人目にはかなり判別が難しいと身をもって知った。

福島では津波の恐ろしさと原発の罪過、沖縄では戦争による悲惨な犠牲。そして、遺族の方々の心中。作業の間、多くのことを思って土を掘った。現地に着て足運びしなければ、知ることも考えることもなかったことばかりだ。卒業後、社会に出てからの自身の行動に、この経験が大きく影響することと思う。私にとって遺骨の捜索は弔いとどまらない、自身が生きていかなければならない社会の行く末をも考える体験だった。



遺骨収集の作業の様子▲

「SPIRITS」卒業の先輩へ 「本当にありがとうございました」



卒業するチアリーディング部の4年生8人
(左から)河内山海さん、小森美稀さん、袖岡結さん、藻垣野乃花さん、芳村舞さん、米田香音さん、川澄祐佳さん、秋元麻依さん

コロナ禍に負けず、4年間チアの活動をやり切る

学生記者・チアリーディング部 谷井花蓮(総合政策2)

2020年の初春から続いているコロナ禍による社会の混乱の中で、大学生の部活動も中止や制約といった影響を受けた。2年生の私が所属するチアリーディング部の活動も例外ではなく、先輩の4年生8人は数々の喜びと困難の記憶を胸に卒業の日を迎えた。卒業生の袖岡結さん(チアリーディング部2022年度主将)、秋元麻依さん、米田香音さんの3人に、部活動をやり切ったからこそ得られた思いや道のりを、後輩で「HAKUMON Chuo」学生記者の私が聞いた。

マスク越し… でも「笑顔の大切さ」 強く実感

今の4年生が1年生だった2020年の冬、新型コロナウイルスがはやり始めた。コロナ禍以前の練習は、「スタッツ」と呼ばれる、数人で組体操のように人を乗せたり飛ばしたりする技を磨くことが中心だった。しかし、他者との接触をなるべく避けなければならぬ状況となり、ダンスやジャンプといった「平場」演技の練習しかできなくなったという。

スタッツで技が決まったときの達成感や喜びは、演技のモチベーションにつながる。袖岡さんは「スタッツ練習が全くできなくなり、部員と成功の喜びを分かち合う瞬間がなくなった。正直、なかなか士気は上がらなかった」と当時を振り返った。

チアリーディングは応援から発祥したスポーツである。応援を目的としているスポーツのため、笑顔が欠かせない。笑顔が魅力の一つであ



米田香音さん▲

り、応援する人にパワーをもたらす。

感染拡大防止のため、マスクを着用した活動となり、さらに声を出しての応援も控えたが、そんな状況だからこそ、選手や観客を盛り上げ、活気づけられるように、笑顔の大切さをそれまで以上に強く実感できた。「マスク越しの笑顔」を常に意識したという。

「1人ではできない競技」 仲間への感謝

授業と部活動を両立するあわただしい日々の中でも、米田さんは時間の使い方を工夫し、さまざまな行動力を培い、人との関わり方を学んだという。いろいろな立場の人に対応した言葉の選び方、立

◀秋元麻依さん

ち居振る舞いなどを、時と場合に応じて対処する術や、その必要性を学んだ。具体的には、自身よりチアリーディング経験の長い後輩や先輩へのアドバイスの仕方、コーチや監督と話すときの言葉遣いなどである。

秋元さんはメンタル面で強くなったと感じている。1年生の頃は、うまくいかないことがあると泣いてばかりいたが、経験を積むにつれて自信が芽生えていったという。そして、その自信が強さを生んだ。できないこと、うまくいかないことにも心が折れずに挑戦できるようになった。卒業を迎えた今、一番感謝しているのは「一緒に練習してくれた仲間の部員です」と力を込めて教えてくれた。

チアリーディングは一人ではできないスポーツである。みんなで一つのものを作り上げていく。先輩の4年生たちは、演技を披露できる応援活動の場や大会、学園祭などを、仲間と励まし合いながら乗り越え





袖岡結さん▲

てきた。袖岡さんは「同期の部員に出会えた」からこそ、入部してよかったと感じている。

後輩たちへ 「今を楽しんで」

後輩部員の私たちへのメッセージを頼むと、3人は「今を楽しんでほしい」(米田さん)、「笑顔のスポーツだからこそ、いつでも笑顔で頑張してほしい」(袖岡さん)、「頑張っていれば、技術面、精神面で成長できる。未来に向かって頑張ってい

い」(秋元さん)と、エールを送ってくれた。

卒業する先輩たちに私から感謝の言葉を送りたいと思います。4年間、本当にお疲れさまでした。先輩方がコロナ禍で多くの困難を乗り越え、部活動の経験を通してさまざまなことを学んだということを知りました。先輩方のように真剣に部活動に向き合い、いずれ引退を迎えるときに、私も「やっ

ていてよかった」と思えるようにしたい。

先輩方にはいろいろなことを教えていただきました。先輩方のおかげで今のSPIRITSがあると思います。本当にありがとうございました。



学生記者でチアリーディング部所属の谷井花蓮さん▲

☆應援團チアリーディング部

1991年創部。加藤郁美監督。部員49人。愛称「SPIRITS」。應援團リーダー部、應援團プラスコア部とともに行う応援活動と、チアリーディング競技の2つの活動を行っている。

応援活動では、硬式野球部、準硬式野球部、アメリカンフットボール部、ボート部、サッカー部などの試合会場で、選手たちにエールを送る。競技では、関東チアリーディング選手権(兼日本選手権関東地区予選)、チアリーディング日本選手権(ジャパンカップ)、学生選手権(インカレ)などの大会を目標に演技に磨きをかけている。

應援團としての活動理念は「選手やチームを奮い立たせ、人の心を動かす応援をする」「活動を通して中央大学の発展、活性化に寄与する」「人のため、社会のために自ら考え行動する人格を養う」。団訓は「規律、礼節、時間厳守」。

